

各科活動報告

集中治療科

担当医

○北山 仁士(集中治療科部長)

認定資格：日本外科学会認定登録医・指導医／三学会構成心臓血管外科名誉専門医／臨床研修指導医／医学博士／堺市難病指定医

○河村 智宏(消化器内科医長)

認定資格：日本内科学会内科指導医／日本消化器内視鏡学会消化器内視鏡専門医／臨床研修指導医／日本救急医学会ICLSインストラクター

○杉山 円(麻酔科部長代行)

認定資格：麻酔科標榜医／日本麻酔科学会指導医／日本専門医機構認定麻酔科専門医／日本心臓血管麻酔学会心臓血管麻酔専門医／臨床研修指導医

活動報告

ICUは全科の集中治療を担うgeneral ICUとして、人工呼吸器、IABP、PCPS(ECMO)等の生命維持装置を駆使した呼吸・循環管理、血液浄化療法による体液管理から、代謝・栄養管理まで、標準かつ最先端のICU管理を行っています。

ICU滞在中はICU担当医が、他職種とともにチームとして質の良い集中治療を提供しています。

専任医師に加え、心臓血管外科、循環器内科、呼吸器内科、麻酔科の協力のもと、看護師のみでなく、薬剤師、栄養師、理学療法士、臨床工学技士と、ICUの治療に関与する全ての職種が積極的に関わり、理想的なチーム医療を実践しています。

2024年度は、ECMO生還例が2桁に向上しました

ECPRの15例でPCPS(VA-ECMO)離脱し、7例が自宅退院、3例転院、死亡5例でした。循環器内科により、適応例に可及的速やかにPCPS装着し、PCI完遂(ACS例)することで急性期を乗り切るECPR例が増加したことや、NOも積極的に用いて、離脱の機会を逃さず心臓血管外科により合併症無く抜去できていることが成績向上に繋がったと思われます。

今後の展望と課題

closed ICUではありますが、原疾患の治療や家族対応等、主科の関わりは不可欠であり、入室患者担当主科との連携強化が必要です。今後も協力要請を根気強く行ってゆきます。

総合診療センター

担当医

○藤本 卓司(救急総合診療科)

認定資格：麻酔科標榜医／京都大学医学部臨床教授／臨床研修指導医／堺市難病指定医

○大矢 亮(副病院長 兼 総合診療センター長 兼 救急総合診療科部長)

認定資格：日本内科学会総合内科専門医・指導医JMECCインストラクター／日本プライマリ・ケア連合学会指導医／SDH検討委員会委員／日本病院総合診療医学会認定 総合特任指導医／日本専門医機構総合診療専門医・総合診療専門研修特任指導医／日本救急医学会ICLSディレクター・インストラクター／ACLS大阪認定ディレクター・認定インストラクター／臨床研修指導医／臨床研修プログラム責任者／日本静脈経腸栄養学会TNT研修会修了／日本老年医学会高齢者医療研修会修了／HANDS-FDF2014修了／認知症サポート医／日本HPHネットワーク運営委員／堺市難病指定医／大阪医科薬科大学臨床准教授

○藤本 翼(救急総合診療科医長)

認定資格：日本内科学会総合内科専門医／日本専門医機構総合診療専門研修特任指導医／臨床研修指導医／堺市難病指定医／日本静脈経腸栄養学会TNT研修会修了

○杉本 雪乃(救急総合診療科医長)

認定資格：日本内科学会総合内科専門医・指導医／日本専門医機構総合診療専門研修特任指導医／JMECCインストラクター／日本救急医学会ICLS認定ディレクター・ICLSワークショップ認定インストラクター／ACLS大阪認定ディレクター・認定インストラクター／JPTECプロバイダー／臨床研修指導医／日本静脈経腸栄養学会TNT研修会修了／HANDS-FDF2011修了

○河村 裕美(救急総合診療科医長)

認定資格：日本内科学会総合内科専門医・指導医／日本専門医機構総合診療専門研修特任指導医／JMECCインストラクター／日本救急医学会ICLSインストラクター／臨床研修指導医／日本静脈経腸栄養学会TNT研修会修了

○松浦 由佳(救急総合診療科医長)(~2025.1)

認定資格：日本内科学会総合内科専門医／日本呼吸器学会呼吸器専門医／日本呼吸器内視鏡学会気管支鏡専門医

○瀬戸 司(小児科医長)

認定資格：日本小児科学会小児科専門医／日本救急医学会ICLSインストラクター／大阪府医師会ACLS大阪認定インストラクター／臨床研修指導医／臨床研修プログラム責任者

○松瀬 房子

認定資格：日本内科学会認定内科医／認知症サポート医／社会福祉士／NST医師教育セミナー修了

○山口 諒也

認定資格：日本内科学会内科専門医／臨床研修指導医

○河村 勇志

認定資格：日本内科学会内科専門医

○若林 美帆(～2024.7)

活動報告

総合内科専門医1名が4月に育児休暇から復帰したことで、前年度よりもさらに厚い病棟スタッフ医師体制で新年度を迎えることができた。また働き方改革の本格的なスタートに向けて、すべてのカンファレンスを時間内に収めるための週間スケジュール変更や朝回診に合わせて勤務時間を30分前倒し、当直明けの午前中帰宅の徹底などの対応を行った。診療実績として、担当入院患者数は前年度678名から757名と増加した。教育面では延べ人数で15人の初期研修医、3人の後期研修医、7人のクリニカルクラークシップ医学生を受け入れた。学術面では18回の学会発表に加えて、河村裕美医師「Positive tourniquet test in dengue fever」と2023年度に初期研修医として所属していた杉義人医師「Acute Mitral Regurgitation Initially Misdiagnosed As Pneumonia: A Case Report」と2つの論文を出すことができた。

救急部門は以前より取り組んでいた下り搬送が6月の診療報酬改定で新設された救急患者連携搬送料として算定できるようになったため、搬送の手順などを整え算定を開始した。冬の救急ひっ迫に対応するために救急病棟の稼働率を上げて運用できるように準備を進め、病床稼働率を約15%から50%以上と高めることができた。医師体制の変更もあったが1年間で7,225件の救急搬送を応需できた。

今後の展望と課題

2025年度はスタッフ医師が2名減る体制で迎えるため、昨年度よりもさらにメリハリのある働き方への変更が求められる。これまでと同様の入院患者数を受け持つことは困難なため、入院患者予算の変更を提案し了承された。その中で引き続き質の高い診療と教育を行っていききたい。教育面では昨年度救急診療と教育の指導を目的にDrを招聘し、オンラインとオンサイトのセッションを通して、診療と教育のレベルアップと一貫性の構築を目指していく。病院だけでなく診療所においても総合診療医のニーズが非常に高まっているため、今年度はこれまでにリクルートに取り組んでいきたい。

循環器センター(循環器内科)

担当医

○石原 昭三(副病院長 兼 循環器センター長)

認定資格：日本内科学会認定内科医総合内科専門医・指導医／日本循環器学会循環器専門医・指導医／日本心血管インターベンション治療学会専門医・施設代表医／日本不整脈心電学会認定不整脈専門医／臨床研修指導医／堺市難病指定医／植え込み型除細動器(ICD)・ペースティングによる心不全治療(CRT)研修修了／堺市身体障害者福祉法指定医師(心臓機能障害)

○具 滋樹(循環器内科医長)

認定資格：日本内科学会認定内科医・内科指導医／日本循環器学会循環器専門医・指導医／臨床研修指導医／心臓リハビリテーション指導士／植え込み型除細動器(ICD)・ペースティングによる心不全治療(CRT)研修修了／堺市身体障害者福祉法指定医師(心臓機能障害)／堺市難病指定医

○鷲見宗一郎(循環器内科医長)

認定資格：日本内科学会認定内科医／日本循環器学会循環器専門医／日本心血管インターベンション治療学会認定医

○南里 直実

認定資格：日本内科学会内科専門医／日本心血管インターベンション治療学会認定医

○成田 亮紀

認定資格：日本内科学会内科専門医／日本循環器学会循環器専門医／日本心血管インターベンション治療学会認定医

○神山 雅喜

認定資格：日本内科学会内科専門医

○有田 速人

認定資格：日本内科学会内科専門医

○大内 賢治

活動報告

2024年度はPCI 641件(うち緊急PCI 192件)、アブレーション137件、PTA 114件であり、PCIおよびアブレーション件数は横ばいも、EVT件数は増加した。また不整脈専門研修施設の認定を受けたことにより、翌年からのアブレーション治療の拡大に繋げることができた。また後期研修医がスタッフとして残るとともに新たに3名の後期研修医を受け入れ、若手中心であるが医師体制は充実しつつある。

今後の展望と課題

1) カテーテル治療のさらなる発展

PCI症例数は頭打ちと考えられるが、アブレーション、EVTはまだ伸びしろがある。

予定症例の治療中で緊急を要する症例の治療が行えない状況も発生しており、2026年度に予定されているカテ室増室により治療体制およびスタッフの労働環境ともに改善を期待したい。

2) パルスフィールドアブレーション(PFA)の開始と件数増加に向けた取り組み

PFAの開始により、治療効果が高まる上に患者負担の軽減、手技時間の短縮が期待でき、今後のカテ室増室と合わせて症例増加につなげていきたい。

3) structural heart diseaseへの対応

カテーテルによる弁膜症治療(TAVIなど)が普及しており、高齢者の心不全治療を考える上で将来的には当院でも実施できることが求められる。増室予定のカテ室をハイブリッドオペ室とし、医師の外部研修も含めてカテーテルでの弁膜症治療開始に向けた準備を進めていく。また循環器診療の継続において心臓外科手術症例数増加が必須課題であるが、そのためには大動脈瘤への緊急手術体制の構築に向けた準備も必要である。

● 循環器センター(心臓血管外科)

担当医

○井上 剛裕(心臓血管外科主任部長)

認定資格：日本胸部外科学会認定医／日本外科学会外科専門医／三学会構成心臓血管外科専門医・指導医／堺市身体障害者福祉法指定医師(心臓機能障害)／堺市難病指定医

○金田 敏夫(心臓血管外科部長)

認定資格：日本外科学会専門医・指導医／日本循環器学会循環器専門医／三学会構成心臓血管外科専門医・指導医／臨床研修指導医／胸部・腹部ステントグラフト内挿術実施医・指導医

活動報告

2024年度における心臓血管外科手術の症例数は、前年と比較して増加いたしました。血管外科症例も増加し、2024年後半からは腹部大動脈瘤のステントグラフト治療(EVAR)導入にむけて準備を進め、医療スタッフと共に学習会をかさね、無事に第1例目を行えました。

65歳以上の高齢者人口の割合が増加するなか、多疾患併存した心臓血管外科患者さんが増えており、慢性心血管疾患や心不全の再増悪、再入院を予防し、介護負担を軽減することが喫緊の課題と考えております。循環器内科との日常的な連携はもとより、多職種チームによる多面的かつ包括的な治療を実践し、矜持をもって協働することで、心臓血管外科治療を大きな問題なく円滑に行うことができたと感じております。一般社団法人NCDが実施するデータベース事業及び、日本心臓血管外科手術データベース(JCVSD)に継続参加しています。

今後の展望と課題

豊かな生活を伴った病後の在り方が求められる現代において、心血管疾患の外科治療にも低侵襲化、早期回復の支援、心臓リハビリテーションの導入、そして在院日数の短縮といった取り組みが期待されています。弁膜症に対する低侵襲手術としてのMICS治療に加えて、腹部大動脈瘤に対するステントグラフト治療も新たに開始しました。患者さんの治療選択肢が広がることで、生活の質の向上を目指した医療提供に努めてまいります。

超高齢社会を迎え、心不全により入退院を繰り返す患者さんの数は年々増加しています。心不全治療は医療資源を多く必要とし、医療経済的にも大きな課題となっています。医療ニーズの多様化が進むなかで、価値観の相違や患者・ご家族の権利意識も強まっています。このような医療新時代の変化に応じて、患者さんやご家族、そして多職種医療スタッフとの対話を重視した、丁寧で納得感のある心臓血管外科治療を行ってまいります。

● 消化器センター

担当医

○山口 拓也(副病院長 兼 消化器センター長)

認定資格：日本外科学会外科専門医・指導医／日本内視鏡外科学会技術認定医／日本消化器内視鏡学会消化器内視鏡専門医／日本消化器外科学会消化器外科専門医・消化器がん外科治療認定医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／手術支援ロボットda Vinci 術者認定／臨床研修指導医／堺市難病指定医

○岩谷 太平(消化器内科部長)

認定資格：日本内科学会総合内科専門医・指導医／日本消化器内視鏡学会消化器内視鏡専門医・指導医／日本消化器病学会消化器病専門医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／臨床研修指導医／堺市難病指定医

○戸口 景介(外科部長)

認定資格：日本外科学会外科専門医・指導医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／厚生労働省認可麻酔科標榜医／日本消化器内視鏡学会消化器内視鏡専門医・指導医／日本消化器外科学会消化器外科専門医・指導医・消化器がん外科治療認定医／日本ヘリコバクター学会H. Pylori(ピロリ菌)感染症認定医／日本腹部救急医学会腹部救急認定医／麻酔科標榜医／堺市難病指定医

○外山 和隆(副病院長 兼 外科部長)

認定資格：日本外科学会外科専門医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／臨床研修指導医／堺市難病指定医

○中江 史朗(腫瘍内科部長)

認定資格：日本外科学会外科専門医・指導医／日本消化器外科学会消化器外科専門医・指導医／日本消化器内視鏡学会消化器内視鏡専門医／日本大腸肛門学会専門医・指導医／日本消化器病学会専門医／日本東洋医学会漢方専門医／日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医・指導医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／臨床研修指導医／医学博士

○李 正煜(肝胆脾外科部長)(2024.6～)

認定資格：日本外科学会外科専門医・指導医／日本消化器外科学会消化器外科専門医・指導医／日本消化器病学会専門医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／日本肝胆脾外科学会評議員／麻酔科標榜医／産業医

○中川 朋(消化器外科医長)

認定資格：日本外科学会外科専門医・指導医／日本消化器外科学会消化器外科専門医・指導医・消化器がん外科治療認定医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／臨床研修指導医

○今井 稔(消化器外科医長)

認定資格：日本外科学会外科専門医／手術支援ロボットda Vinci 助手認定／臨床研修指導医／堺市難病指定医

○松田 友彦(消化器内科医長)

認定資格：日本内科学会総合内科専門医・指導医／臨床研修指導医

○河村 智宏(消化器内科医長)

認定資格：日本内科学会内科指導医／日本消化器内視鏡学会消化器内視鏡専門医／臨床研修指導医／日本救急医学会ICLSインストラクター

○土居 桃子

認定資格：日本外科学会外科専門医／日本消化器外科学会消化器外科専門医・指導医／日本ヘルニア学会単径部ヘルニア修得医／日本乳癌学会乳腺認定医

○櫻井 史歩

認定資格：日本内科学会総合内科専門医・指導医／臨床研修指導医

○平林 邦昭

認定資格：日本外科学会外科専門医・指導医／臨床研修指導医／堺市身体障害者福祉法指定医師(小腸機能障害)(膀胱又は直腸機能障害)／堺市難病指定医

○岡田 正博

認定資格：日本消化器内視鏡学会消化器内視鏡専門医／堺市身体障害者福祉法指定医師(肝臓機能障害)／堺市難病指定医

○坂本 祥大

認定資格：日本外科学会外科専門医

○後藤 泰裕

○深野耕太郎(後期研修医)

活動報告

消化器センター(内科)は上部、下部消化管の出血に対しては24時間365日緊急対応する体制を敷き、コロナ禍以降も治療数は維持されており堺市内の医療向上に寄与しました。悪性疾患等による消化管閉塞に対してはステント治療を広く取り入れ、速やかな手術療法への移行を行い低侵襲な治療を可能にしています。胆道系疾患に対する定期、緊急ERCPも数年間過去最高記録を更新し続けています。

消化器センター(外科)では消化管外科、乳腺外科、ヘルニア外科などを主に行いました。消化管及びヘル

ニア外科では、その多くを腹腔鏡下に行っています。直腸癌に対しては手術支援ロボットシステム(da vinci)や集学的治療を取り入れています。前方手術のみならず、経肛門アプローチを用いたTPE症例(TaTPE)でも可能な症例には肛門温存を行なっています。2024年度は胃がん手術も30例を超えました。ヘルニア手術も年間120例となりました。2024年度は地域ニーズに応えるべく外科緊急症例が250例を超えました。

今後の展望と課題

- 1) 放射線治療の本格始動と周術期センターの整備、外科・内科・放射線科が連携したトライアングル型のがん治療体制が整えるため放射線装置導入、化学療法室拡張を2027年までに行います。また、周術期管理の質を高めるため、**手術期支援センター(仮称)**を立ち上げ、術前評価からリハビリまで一貫した周術期管理を開始します。
- 2) ロボット手術の領域拡大と手技の進化
直腸がんにおけるda Vinci手術の経験をもとに、胃がん・結腸がん・ヘルニア手術などへの適応拡大を進めます。低侵襲かつ機能温存の治療をさらに高めていきます。
- 3) 専門チームの拡充と教育的環境の強化
内視鏡治療やERCP、ステント治療など高度技術の維持・継承に向けて、若手医師への教育プログラムの標準化を行います。さらに、肝胆膵・消化管・乳腺・ヘルニアの臓器別カンファレンスを導入し、専門性の高いディスカッションと治療提案を進めます。
- 4) 患者・家族中心の医療を支えるチーム医療の進化
2024年に軌道に乗せた横断的カンファレンスをさらに進化させ、看護師・薬剤師・リハビリ・栄養・医療ソーシャルワーカーが積極的に参加する「意思決定支援カンファレンス」へと発展させます。ACP(アドバンス・ケア・プランニング)も日常的に組み込み、QOLを重視した医療提供を推進します。
- 5) 漢方・補完医療・緩和ケアの一体的提供
腫瘍内科や緩和ケアチームとの協働をさらに進化させ、がんと共に生きる医療を提供します。漢方外来の拡充、在宅医療との連携強化に加え、がん患者サロンやピアサポートの導入も検討し、患者さんの「生きる力」を支援します。

乳腺外科

担当医

○小田 直文(乳腺外科部長)

認定資格：日本外科学会外科専門医／日本乳癌学会乳腺専門医・指導医／検診マンモグラフィー読影認定医(AS評価) 乳房超音波医師講習(A判定)／医学博士／臨床研修指導医／日本乳房オンコプラスチックサージャリー学会乳房エキスパンダー・インプラント責任医師／HBOCコンソーシアム教育セミナー受講

○裕野 孝治

認定資格：日本外科学会外科専門医／日本消化器外科学会認定医／臨床研修指導医／堺市難病指定医

活動報告

2024年度は呼吸器内科医の退職に伴い、エンハーツの使用ができなくなりました。重大な影響が考えられましたが、被害は最小限にとどめることができましたと考えられます。また、症例ベースでは2024年度は乳癌手術症例は昨年比で増加しましたが、紹介患者数は横ばいでした。これは、乳癌手術症例が効率的に紹介されていることを反映し、開業医等への訪問活動が奏功している可能性が考えられました。検査件数ではマンモグラフィ(保険+検診)数は一昨年の減少から一転して増加していました。これは、手術件数の動向と一致し、マンモグラフィ検査数と手術症例に相関関係がある可能性が示唆されました。一方で、乳腺エコー件数は年間1,700件台で横ばいでした。また、乳腺造影MRI数は2021年より毎年増加していました。これは、精査を要する症例が増えていることが示唆されます。乳腺エコーの新しい技師の育成活動に伴い、開業医医師(しょうのクリニック)の見学・トレーニングを受け入れ、乳がん検診精度管理機構の試験合格に向け、鋭意トレーニングを継続中です。

今後の展望と課題

2025年度は2024年度の活動報告で示した横ばいの項目である①紹介患者数の増加に取り組みたいと存じます。まず直近でできることとしては開業医訪問活動を見直します。これまで、年2回開業医訪問を行っていましたが、今後は通年で乳腺外科に力をいれて訪問活動を行っていきます。さらに、紹介症例の受診までの待ち日数を短縮する目的で、外来に紹介枠を確保、直近での予約を取りやすくするよう、外来・地域連携室

と調整中です。次に、横ばいの項目である②乳腺エコー件数は、検査としては2～3か月先まで予約が埋まっており、外来枠とともに更なる拡大に向けた取り組みを検討していきます。最後に、上記で述べた手術症例とマンモグラフィ検査の相関関係が真であれば、手術症例の増加には、健診科でのマンモグラフィ検査数増加が今後の乳癌手術症例増加に欠かせない事象であると展望します。また紹介していただいた患者さんにより専門的なケアを提供するため、早期に認定看護師の育成も進めていきます。

● 腎・透析センター(腎臓内科・透析)

担当医

○大矢 麻耶(腎・透析センター長 兼 腎臓内科部長)

認定資格：日本内科学会総合内科専門医・指導医／日本腎臓学会認定腎臓専門医・指導医／臨床研修指導医／堺市身体障害者福祉法指定医師(腎臓機能障害)／堺市難病指定医

○植田祐美子(腎臓内科医長)

認定資格：日本内科学会総合内科専門医・指導医／日本腎臓学会認定腎臓専門医・指導医／日本フットケア学会認定フットケア指導士／臨床研修指導医／堺市身体障害者福祉法指定医師(腎臓機能障害)／堺市難病指定医

○坂野 恵里(腎臓内科)

認定資格：日本泌尿器科学会専門医・指導医／日本透析医学会専門医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／日本旅行医学会認定医

○三世川宗一郎

認定資格：日本内科学会総合内科専門医

活動報告

2024年度は、腎臓内科としては急性腎障害の対応が多かった。年々高齢者のAKIが増えてきており、緊急入院での対応が増えている。またCKD外来の充実ができ、栄養士、看護師とともにCKD外来を開始できたことで、今後のCKD治療をより一層強化できたと感じている。今後、AKIを少しでも減らすためにも、ますますCKD対策は重要となってくるため強化していきたい。

透析部門については、仕事を終えてからの準夜透析時間の終了を延長した。対応時間を延ばすことで、定期である4時間透析の希望があるときには、5時間に延長できるようにした。若くてしっかりたべておられる就労中の患者さんたちには、5時間になったとたんに体調がよくなるという反響もあり、少しでも透析患者のQOL、予後改善に役立てるかと思われる。またコメディカルを始め、学会発表がこれまでに多く、また評価もされた年だった。

今後の展望と課題

透析分野での発表は、今年度高く評価された。今後引き続き院外への活動を広げていきたい。外部からも認められる医療活動を維持し、発信していきたい。

また、働く透析患者さんたちを応援したいとの思いから、来年度に向けてオーバーナイト透析を準備中である。今後ニーズを聞きながら早急に検討していきたい。

● 代謝・膠原病内科

担当医

○川口 真弓(代謝・膠原病内科部長)

認定資格：日本内科学会総合内科専門医・指導医／日本糖尿病学会糖尿病専門医・指導医／リウマチ登録医／堺市身体障害者福祉法指定医師(肢体不自由)／臨床研修指導医／堺市難病指定医

○岩崎 桂子(代謝・膠原病内科医長)

認定資格：日本内科学会認定内科医／臨床研修指導医

○林 萌乃果

認定資格：日本内科学会内科専門医

活動報告

関連が強い腎臓病グループと同じ病棟でチームとしてカンファレンス・回診を行い研修医の教育も行なっています。開業医の先生方からの紹介も受け入れ、入院及び外来フォロー等で連携を進めています。

【糖尿病内科】

○2024年度診療内容

入院患者の加療

- ・教育入院11日間、月に3回
- ・糖尿病を基礎疾患にもつ重症入院患者
- ・外科系の各診療科の内科マネージメント

外来患者の加療

- ・耳原総合病院 糖尿病紹介外来 母性内科(妊娠糖尿病を中心)外来
- ・サテライト診療所(みみはら高砂クリニック)での糖尿病外来
- ・堺北診療所の糖尿病外来

【膠原病内科】

初発の関節リウマチ、他血管炎など膠原病患者を研修医とともに診断、加療を行っています。また外来フォローも行なっています。

膠原病を基礎疾患にもつ患者の感染症などでの入院時の対応も行なっています。

今後の展望と課題

初期、後期研修医もローテートで回ってくることが増え、カンファレンスも活気が出てきました。糖尿病診療のスキルを生かし急性疾患のみならず、慢性疾患を診ることのできるチーム医療を目指し、その楽しさを研修医にも経験してもらえようような研修システムを作っていきたいと思います。

外来通院の妊婦さんの糖尿病、甲状腺治療を専門医がフォローし、安全な分娩につなげるため妊娠糖尿病外来を開設しています。外来部門との合同カンファレンスなどを通じて更なる連携を深めるとともに開業医の先生との関わりも深めていくことで、多くの患者さんが安心して病気と付き合いけるよう支えていきたいと思っています。

呼吸器外科

担当医

○佐藤 泰之(呼吸器外科部長)

認定資格：医学博士／日本外科学会外科専門医／日本消化器外科学会認定医／ICD(Infection Control Doctor)／臨床研修指導医／身体障害者福祉法指定医師(呼吸器機能障害)

活動報告

2024年度呼吸器外科の手術件数は、2023年度38件から増加し46件となりました。今年度もその増加傾向のまま手術件数は伸びていました。内訳は、肺癌に対する肺葉切除術、肺癌(9件)や肺転移(2件)などに対する肺部分切除術、気胸の手術、膿胸に対する手術、縦隔の手術、手掌多汗症に対する交感神経遮断術、など例年と同じような内容です。それら全身麻酔の全ての手術を完全鏡視下胸腔鏡手術で行っており、緊急開胸例もなく安全な手術が行われています。また、問題となる術後合併症はなく、全例自宅退院となっています。

最近の特異な傾向としては、比較的早期で肺葉切除さえできれば肺癌を根治できる状況ながら、あまりに呼吸機能が悪いがために部分切除しかできない症例やそれすらできない症例が目立っていました。

総括としては、手術の要としたところの肺癌に対する肺葉切除術が再増加したこともあり、また近隣クリニックからの紹介も急増しており、今後も継続した増加傾向が充分期待できる状況となっています。

今後の展望と課題

当科の診療はこれをもちまして一旦終了となりますが、2026年1月より再開を予定しております。

小児科

担当医

○藤井 建一(小児科部長)

認定資格：日本小児科学会小児科専門医・指導医／臨床研修指導医／堺小児科医会理事／堺市難病指定医

○瀬戸 司(小児科医長)

認定資格：日本小児科学会小児科専門医／日本救急医学会ICLSインストラクター／大阪府医師会ACLS大阪認定インストラクター／臨床研修指導医

○瀬邊 翠(小児科医長)

認定資格：日本小児科学会小児科専門医／臨床研修指導医

○阿曾沼良太(小児科医長)

認定資格：日本小児科学会小児科専門医／JPLS小児診療初期対応コース修了／NCPR Aコース修了

○佐藤結衣子(小児科医長)

認定資格：日本小児科学会小児科専門医／臨床研修指導医

○安田のぞみ(～2024.11)

認定資格：日本小児科学会小児科専門医

○山本 徳高(後期研修医)(～2024.9)

○上田美智子(後期研修医)(2024.10～)

活動報告

9階病棟は、2020年7月より小児科・整形外科・内科との混合病棟(33床)で運営していますが、小児の入院患者数については今年度もコロナ前の3～4割程度と伸び悩んでいます。各種ワクチンの普及や感染予防の習慣が定着して、感染症による入院が明らかに減少しています。また、7年前から始めた重症心身障害児者のレスパイト入院(スマイルケア入院)もコロナの影響で一時中断しておりましたが、今年度は1日2名の受け入れまで戻し継続した受け入れを行いました。新生児医療に関しては2020年7月よりNICU(新生児集中治療室)を3床開設、当院出生の新生児を状態が悪化する前に治療介入して対応しています。研修病院としては初期研修医と後期研修医(近畿大学病院、大阪市立総合医療センター)の受け入れを継続しました。

今後の展望と課題

小児科常勤医師体制としては2024年度末に3名が退職、今年度から2名が新たに加わり常勤医5名体制となり、責任者が藤井から瀬戸に変更しています。日勤帯の支援目的に近畿大学病院小児科学教室から医師の支援を受けています。

小児医療に関しては、当院出生児を含めた地域のこども達にとってのかかりつけ病院として入退院の敷居を低く設け、医療圏における輪番病院としての機能を果たしていく必要があると考えます。スマイルケア入院に関しては体制の変化もあり、安全面を考慮して受け入れ数は抑えています。それでも月に10名強の患者を受け入れており継続した運営を行なっております。今、在宅診療所管理の患者や近畿大学移転に伴うニーズの増加が予想されるため、安全面を維持しながら受け入れ数拡大を模索していく必要があります。また、食物負荷試験も試験日を週2回(水・金曜)に増加、試験数の拡大を目指しています。同時に今年度より近畿大学病院からアレルギー専門医(竹村豊医師)を招聘、毎週金曜日に総合病院でアレルギー外来を行なっております。管理困難症例や地域の開業医からの紹介を受け入れていく予定です。

新生児医療に関しては、本邦における急激な少子化の波を受けながらも700件／年と非常に高い数で分娩数を維持しております。全国的に周産期センターの集約化が進む中、堺区内で唯一分娩が可能な総合病院として、分娩数の維持、安全な新生児医療の提供を継続していきます。また、社会的ハイリスク妊婦の受け入れを含め、行政と連携を継続しながら当院周産期センターに求められる医療を継続していきます。

救急体制としては集約化や働き方改革の影響もあり、当直体制の確保がますます困難となっておりますが、安全な新生児医療の提供、医療圏における輪番病院としての役割を果たすためにも、24時間365日受け入れ態勢を維持していく予定です。

2024年度 小児科 疾患別統計

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	総計
入院件数	81	61	51	70	60	62	72	64	72	50	58	59	760

2024年度 上位疾患

疾患名	件数
妊娠期間短縮、低出産体重に関する障害	244
てんかん	70
食物アレルギー	70
肺炎等	42
上気道炎	40
急性気管支炎、急性細気管支炎、下気道感染症	38
喘息	31
ウイルス性腸炎	28
インフルエンザ、ウイルス性肺炎	26
その他の感染症(真菌を除く)	26

周産期ファミリーケアセンターおよび産婦人科

担当医

- 坂本 能基(副院長 兼 診療部長 兼 周産期ファミリーケアセンター長 兼 産婦人科部長)
認定資格：日本産科婦人科学会産婦人科専門医・指導医／日本産科婦人科内視鏡学会腹腔鏡技術認定医／日本女性医学学会認定女性ヘルスケア専門医・指導医／日本東洋医学会漢方専門医／母体保護法指定医／臨床研修指導医／堺市難病指定医
- 下向 麻由(産婦人科医長)
認定資格：日本産科婦人科学会産婦人科専門医・指導医／日本産科婦人科内視鏡学会腹腔鏡技術認定医／日本内視鏡外科学会産婦人科技術認定医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／手術支援ロボットda Vinci術者認定／臨床研修指導医
- 高木 力(産婦人科医長)
認定資格：日本産科婦人科学会産婦人科専門医／手術支援ロボットda Vinci術者認定／母体保護法指定医／臨床研修指導医
- 高橋 寛人(産婦人科医長)
認定資格：日本産科婦人科学会産婦人科専門医／手術支援ロボットda Vinci術者認定／日本周産期・新生児医学会母体・胎児専門医／母体保護法指定医
- 瀧口 義弘
認定資格：日本産科婦人科学会産婦人科専門医／母体保護法指定医師
- 松原 侑子(～2024.8)
認定資格：日本産科婦人科学会産婦人科専門医／臨床研修指導医
- 内田 学
認定資格：日本産科婦人科学会産婦人科専門医／麻酔科標榜医／日本乳がん検診精度管理中央機構マンモグラフィ読影認定医／堺市身体障害者福祉法指定医師(小腸機能障害)(膀胱又は直腸機能障害)
- 齋藤 庸太
- 佐藤 孝憲

活動報告

＜産 科＞ 妊婦から見た当院の魅力である以下の点を特に意識して取り組みました。

- ・総合病院であり、安全、安心、信頼がある。
帝王切開率は一般病院と比較して低い、新生児仮死が少なく、安全・安心・信頼のお産を実現できている。
無痛分娩を安全に管理出来るように、ガイドライン安全基準を満たしている。
超緊急帝王切開・母体救命処置法・新生児蘇生処置法を訓練し、実施できている。
NICUが設備され運営されている。
- ・分娩費が他院と比較して安く、良心的である。
分娩一時金内に分娩費用を設定。

- ・母子同室 全室個室化(差額室料は無料)
家族のふれあいの実現が達成できている⇒新型コロナ感染防止対策で制限
休養をとりやすい環境を提供できている。
 - ・立ち会い分娩 陣痛期、分娩期を通して、家族とともに過ごせる環境づくり⇒新型コロナ感染防止対策で制限
 - ・小児科との連携強化
- 《婦人科》 婦人科3分野、腫瘍、内分泌、ウィメンズヘルスケアを網羅している。
- ・腫瘍
がん：婦人科がん全ての癌手術が可能。放射線療法は他院と連携。
内視鏡下手術(腹腔鏡・子宮鏡)：婦人科手術の約80%は鏡視下手術。
 - ・不妊症は保険適応内診療が可能
 - ・ウィメンズヘルスケア 専門医による診療
女性心身症、更年期障害、適応障害、不安障害、産後うつ病、骨粗鬆症。
婦人科内分泌学、心身医学、東洋医学をバランス良くミックスし、幅広い治療を行っている。

今後の展望と課題

- ・医療の質をさらに高める努力をします。
LSC、V-Path-laparosurgery、MEAを導入しました。
ロボット手術を導入しました。
- ・新たな命の誕生を祝福できる環境の整備を継続します。
- ・医師・助産師・看護師の数・質ともに向上させます。

泌尿器科

担当医

○齋藤 允孝(泌尿器科部長)

認定資格：日本泌尿器科学会泌尿器科専門医・指導医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／日本泌尿器内視鏡・ロボティクス学会泌尿器腹腔鏡技術認定医／手術支援ロボットda Vinci 技術認定／堺市身体障害者福祉法指定医師(膀胱又は直腸機能障害)／大阪府小児慢性特定疾患指定医

○松村 直紀(泌尿器科医長)

認定資格：日本泌尿器科学会泌尿器科専門医・指導医／日本腎臓学会腎臓専門医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／手術支援ロボットda Vinci 術者認定／堺市身体障害者福祉法指定医師(膀胱又は直腸機能障害)

○吉田 和裕

認定資格：日本泌尿器科学会泌尿器科専門医／手術支援ロボットda Vinci 助手認定

○前之園大介(～2024.9)

○吉村 悠(2024.10～)

活動報告

2024年4月から齋藤が部長職を引き継がせて頂きました。4月よりda Vinciを用いたロボット支援手術を開始しました。ロボット支援手術は前立腺全摘除術が11例、腎部分切除術を2例を行いました。次年度より膀胱全摘除術を含めたロボット支援手術件数を増やしていきたいと考えています。

今後の展望と課題

ロボット支援手術症例の増加と維持

整形外科

担当医

○河原林正敏(病院長)

認定資格：日本整形外科学会整形外科専門医／臨床研修指導医／堺市身体障害者福祉法指定医師(肢体不自由)／堺市難病指定医

○吉岡 篤志(整形外科部長)

認定資格：日本整形外科学会整形外科専門医／臨床研修指導医／堺市難病指定医

所属学会：日本整形外科学会／日本脊椎脊髄病学会／日本骨粗鬆症学会／中部日本整形外科災害外科学会

○小松 俊介(整形外科医長)

認定資格：臨床研修指導医

所属学会：日本整形外科学会／中部日本整形外科災害外科学会／北海道整形災害外科学会

活動報告

- ・当院整形外科では、骨折を主とした外傷の手術に加え、脊椎手術や人工関節置換術にも力を入れています。脊椎の手術は、大半の症例を顕微鏡視下で行っております。人工関節置換術には侵襲の少ないアプローチ法を導入しております。治療を受けられる患者さんの身体への負担を極力減らすべく、当科では低侵襲手術の実践に引き続き取り組んでいきます。
- ・高齢化・併存疾患の重症化に伴い、近年は手術リスクの高い患者さんが増加しております。麻酔科、内科、循環器内科と連携し、必要時には他科との合同カンファレンス、他職種を含めた倫理カンファレンス等を行い、患者さんにとってより良い治療を提案しております。
- ・2024年度の総手術件数は347件、脊椎手術は115件、人工関節手術は48件でした。

今後の展望と課題

他院所との連携を行い、より患者さんにやさしい医療・手技を進め、整形外科診療のさらなるレベルアップを図っていきたいと考えます。

脳神経外科

担当医

○田中 禎之(副病院長 脳神経外科・リハビリテーション科部長)

認定資格：医学博士／日本脳神経外科学会脳神経外科専門医／日本脳神経外科学会近畿支部学術評議員／日本脳卒中学会脳卒中認定専門医／日本救急医学会認定ICLS・BLSコースディレクター／日本救急医学会・日本神経救急学会認定ISLSディレクター／臨床研修指導医／共用試験医学系OSCE評価認定講習会修了／回復期リハビリテーション専従医研修会修了／堺市身体障害者福祉法指定医師(肢体不自由)

活動報告

- 2024年9月24日：Epilepsy Web Seminar 講演「回復期リハビリ病棟におけるてんかん治療」
- 2024年10月20日：第90回耳原総合病院二次救命処置コース 開催
- 2024年12月15日：第5回みみはらISLS-WSコース 開催
- 2024年12月15日：第6回みみはらISLSコース 開催
- 2025年1月9日：第1回ISLS泉大津急性期メディカルセンターコース 参加

今後の展望と課題

急性期病院ならびに診療所と連携をはかり、紹介・逆紹介患者数を増やします。
脳外科連携病院に、緊急治療が必要な患者さんを速やかに紹介します。
将来を見据え脳神経外科専門医、脳血管内治療専門医、脳卒中認定医を積極的に募集します。
脳神経外科専門医を獲得できれば手術を開始します。
脳血管内治療専門医を獲得できれば脳血管内治療を開始します。
脳卒中認定医を獲得できれば一次脳卒中センター(PSC)を申請します。
複数名のスタッフが揃えばSCUを設置、24時間体制で脳卒中急性期治療を行います。

リハビリテーション科

担当医

○田中 禎之(副病院長 脳神経外科・リハビリテーション科部長)

認定資格：医学博士／日本脳神経外科学会脳神経外科専門医／日本脳神経外科学会近畿支部学術評議員／日本脳卒中学会脳卒中認定専門医／日本救急医学会認定ICLS・BLSコースディレクター／日本救急医学会・日本神経救急学会認定ISLSディレクター／臨床研修指導医／共用試験医学系OSCE評価認定講習会修了／回復期リハビリテーション専従医研修会修了／堺市身体障害者福祉法指定医師(肢体不自由)

活動報告

【総スタッフ数】理学療法士35名、作業療法士18名、言語聴覚士9名

【入院からリハ処方までの日数】平均1.1日 2日以内の処方割合96%

【回復期リハビリ病棟】50床

【回リハ病棟リハビリスタッフ数】理学療法士18名、作業療法士10.5名、言語聴覚士2名

【回リハ平均提供単位数】5.71単位(脳血管疾患6.8 運動器5.3 廃用5.5)

【回リハ平均在院日数】50.2日

【在宅復帰率】84.8%

【実績指数】平均43.4点

ICUの超急性期から一般病棟、回復期リハ病棟、緩和ケアと多方面にリハビリを提供しています。

複数の心臓リハビリテーション指導士による心臓リハビリを提供しています。

呼吸療法認定士による呼吸リハなど専門分野に取り組んでいます。

がんリハビリテーションにも取り組んでおり、研修に4名参加しました。

一般病棟では認知症・せん妄対策にチームで取り組んでいます。

透析リハビリテーションにも多職種で取り組んでいます。

地域保健予防活動として月に1回体操教室を開催しています。

今後の展望と課題

2025年問題に向け、今後益々回復期リハビリ病棟の需要が高まると考えられます。

回復期リハビリ病棟では、提供単位数確保のため休日リハビリを継続していきます。

術前呼吸器リハビリテーションが開始され、さらに多くの患者さんに介入しています。

がんリハビリテーションもパンフレットを用いて指導を行っています。

患者さんに必要なリハビリ単位数を受けて頂くために、さらにスタッフの増員に取り組めます。

脳神経外科専門医としてスタッフを教育・指導し、質の高いリハビリ医療の提供を目指します。

緩和ケア科

担当医

○末田 早苗(緩和ケア科部長)

認定資格：日本内科学会認定内科医／日本血液学会専門医／日本緩和医療学会認定医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／緩和ケア指導者研修会修了

○広川恵寿輝

認定資格：日本内科学会内科専門医／緩和ケア研修会修了／日本がん治療認定医機構がん治療認定医

○小林 広幸

認定資格：日本精神神経学会精神科専門医・指導医／精神保健指定医／緩和ケア研修修了

○武智 浩子(2024.9～)

認定資格：日本外科学会外科専門医／緩和ケア研修修了

活動報告

- ・2024年4月に小林医師が着任、6月末に非常勤医師の大竹医師が退職された。8月に医師1名が育児休暇から復帰、さらには9月に医師1名が着任し緩和ケア医が常勤4人体制となった(医師1名は時短勤務)。しかしながら2025年3月に医師1名が退職となり再び3人体制となった。

- ・堺市の緩和ケア普及イベントや地域の緩和ケア研修会などに積極的にパネリストとして参加し当院緩和ケア科の広報を行った。
- ・堺市医師会からの依頼による開業医の緩和ケア病棟実習の受け入れを複数回行った。
- ・入院患者数獲得に向けて、緩和面談外来の実施日を週2日から週4日に増設した。
- ・症状コントロール外来の充実に向けて定期的に関係各所と連携をとりながら検討を重ねた。
- ・他科専攻医の緩和ケア研修を受け入れ教育を行った。

今後の展望と課題

- ・緩和ケアスタッフ医の認定医、専門医獲得に向けての教育を実施する。
- ・学会発表など積極的に実施する。
- ・地域の緩和ケア普及に貢献する。

緩和病棟関連資料

	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
入院患者数	317	303	299	329	354
延べ患者数	7,608	6,945	7,138	7,000	7,366
病床利用率	87%	76%	78%	80%	84%
平均在科日数	24日	23.2日	23.7日	21.1日	21日

紹介先のリストと紹介数

紹介元	入院件数	面談件数
院内・法人内	177	181
堺市立総合医療センター	75	171
近畿大学病院	7	32
大阪ろうさい病院	8	13
大阪国際がんセンター	5	23
大阪急性期・総合医療センター	5	9
いのうえ在宅診療所	8	10
馬場記念病院	4	3
清恵会病院	3	5
その他	62	87
合計	354	534

オピオイド持続投与人数 172名
 調整型鎮静使用人数 43名
 鎮静を必要とした患者数 1名

入院してから1週間ごとの死亡数

	日数	死亡数
第1週	1～7	80
第2週	8～14	54
第3週	15～21	38
第4週	22～28	16
第5週	29～35	19
第6週	36～42	17
第7週	43～49	10
第8週	50～56	3
第9週	57～63	5
第10週	64～70	1
第11週	71～77	1
第12週	78～84	2
第13週	85～91	1
第14週	92～98	1
合計		248

緩和ケア研修会修了者 2024年7月現在 106名

緩和ケア科	末田 早苗	産婦人科	坂本 能基	小児科	藤井 建一
緩和ケア科	小林 広幸	産婦人科	内田 学	小児科	阿曾沼良太
緩和ケア科	広川恵寿輝	産婦人科	高橋 寛人	小児科	瀬邊 翠
総合診療センター	藤本 卓司	産婦人科	高木 力	小児科	瀬戸 司
総合診療センター	松瀬 房子	産婦人科	瀧口 義弘	小児科	佐藤結衣子
総合診療センター	安田恵津子	産婦人科	松原 侑子	小児科	安田のぞみ
総合診療センター	大矢 亮	産婦人科	下向 麻由	泌尿器科	齋藤 允孝
総合診療センター	藤本 翼	産婦人科	齋藤 庸太	泌尿器科	松村 直紀
総合診療センター	杉本 雪乃	産婦人科	佐藤 孝憲	泌尿器科	吉田 和裕
総合診療センター	河村 裕美	産婦人科	大平原麗華	病理診断科	木野 茂生
総合診療センター	松浦 由佳	産婦人科	門脇真理子	組織健診科	松浦 英夫
総合診療センター	瀬戸 司	外科	山口 拓也	歯科口腔外科	柳澤 高道
総合診療センター	山口 諒也	外科	平林 邦昭	歯科口腔外科	中川 典子
総合診療センター	河村 勇志	外科	外山 和隆	放射線科	岩本 卓也
高砂 C L	川尻 英子	外科	戸口 景介	放射線科	三田 裕記
高砂 C L	河村 明子	外科	中川 朋	脳神経外科	田中 禎之
腎・透析センター	大矢 麻耶	外科	今井 稔	精神科	森田 大樹
腎・透析センター	坂野 恵里	外科	李 正煜	精神科	金 詩園
腎・透析センター	植田祐美子	外科	土居 桃子	専攻医	渡部亮太郎
腎・透析センター	三世川宗一郎	外科	坂本 祥大	専攻医	西田 一晃
呼吸器内科	緒方 洋	外科	深野耕太郎	専攻医	森本 将梧
呼吸器外科	佐藤 泰之	乳腺外科	小田 直文	専攻医	中井 優斗
整形外科	河原林正敏	乳腺外科	裕野 孝治	専攻医	河島 匠吾
整形外科	吉岡 篤志	循環器センター	石原 昭三	専攻医	野坂 哲平
整形外科	小松 俊介	循環器センター	具 滋樹	専攻医	川西 修平
消化器内科	岩谷 太平	循環器センター	鷺見宗一郎	専攻医	八田 寛朗
消化器内科	岡田 正博	循環器センター	成田 亮紀	専攻医	吉田 和樹
消化器内科	松田 友彦	循環器センター	南里 直実	専攻医	阿比留輝一
消化器内科	河村 智宏	循環器センター	神山 雅喜	専攻医	緒方 隼
消化器内科	櫻井 史歩	循環器センター	有田 速人	専攻医	高阪 太夢
消化器内科	細谷 聖美	心臓血管外科	井上 剛裕	研修医	高橋 秋穂
消化器内科	後藤 泰裕	心臓血管外科	金田 敏夫	研修医	田畑 治希
麻酔科	杉山 円	代謝・膠原病内科	川口 真弓	研修医	調子 達郎
麻酔科	南方 綾	代謝・膠原病内科	岩崎 桂子	研修医	新野 黎
麻酔科	江尻加名子	代謝・膠原病内科	林 萌乃果		
麻酔科	中村 佳世	腫瘍内科	中江 史朗		

精神科

担当医

○森田 大樹(精神科部長)

認定資格：精神保健指定医／日本精神神経学会精神科専門医／日本総合病院精神医学会特定指導医／臨床研修指導医

○杉田 義郎(非常勤)

認定資格：精神保健指定医

○大野 草太(非常勤)

認定資格：精神保健指定医／日本精神神経学会精神科専門医

活動報告

外来診療において、精神疾患全般の診療に当たりました。初診患者数は年間65人でした。受診年齢層は20代から高齢層まで幅広くなっています。対症症例としては、家庭内や職場内のストレス、トラブルが原因の神経症圏が最も多く、うつ病、続いて認知症圏、精神病の急性期や慢性期などでした。他の医療機関からの紹介患者も多く、年間35件ありました。

当院が総合病院である為、院内他科からの診療依頼も多く、コンサルテーション・リエゾン活動も活発に行いました。

また、当院のリエゾンチームには当科医師も加わっております。このため上述のような精神科医師への直接的な個別の診療依頼に応じる形だけではなく、せん妄の患者さんを中心にリエゾンチームとして依頼を受ける形もとっておりました。この場合には「せん妄ラウンド」と称して、週に1回のラウンド(カルテラウンドを含む)を行いました。このラウンドは、1年を通して実地できました。

また、3年前からはリエゾンチームだけでなく、①緩和ケアチーム(主に緩和ケア科との協働)、②母子ケアチーム(主に産婦人科や小児科との協働)の2チームにも新たに参加するようになりました。

介護老人保健施設みみはらにも月1回往診を継続しました。入所されている方の精神症状が顕著となった場合の診察を主に実地しました。

今後の展望と課題

当院の精神科外来診療の特色で挙がるのは、「他科との併診」という形の多さです。これは、地域の精神科クリニックとは異なり、当院が総合病院であることを反映しているものと考えられます。つまり、「当院や法人内診療所で他科も受診している患者さん」の当科受診希望に対応していくことは、地域のニーズに応えるために欠かせないポイントであるため、今後も実践していく所存であります。

また、当科は病床を有しておりません。しかし他科入院中の患者さんが様々な精神症状を呈した際に、主治医や病棟スタッフと共にアプローチを講じていく、いわゆる「リエゾン・コンサルテーション」にも重点をおいております。「活動報告」でも述べた通り、精神科医師が個別に直接対応する形と、リエゾンチームとして対応する形、さらには緩和ケアチームや母子ケアチームとして対応する形を継続していきます。

老人保健施設みみはらへの定期的な往診は今後も継続していきます。

麻酔科

担当医

○近畿大学からの招聘医師(麻酔科部長)(~2024.10)

認定資格：麻酔科標榜医／日本麻酔科学会麻酔科専門医・指導医／日本ペインクリニック学会専門医／臨床研修指導医

○杉山 円(麻酔科部長代行)

認定資格：麻酔科標榜医／日本麻酔科学会麻酔科指導医／日本専門医機構認定麻酔科専門医／日本心臓血管麻酔学会心臓血管麻酔専門医／日本医師会認定産業医／臨床研修指導医

○中村 佳世(麻酔科医長)

認定資格：麻酔科標榜医／日本麻酔科学会麻酔科指導医／日本専門医機構認定麻酔科専門医／新生児蘇生法(Aコース)修了

○江尻加名子(麻酔科医長)

認定資格：麻酔科標榜医／日本麻酔科学会麻酔科指導医／日本専門医機構認定麻酔科専門医／日本心臓血管麻酔学会心臓血管麻酔専門医／日本医師会認定産業医／臨床研修指導医

○南方 綾(~2024.7)

認定資格：麻酔科標榜医／日本麻酔科学会麻酔科専門医／日本小児麻酔学会小児麻酔認定医／日本周術期経食道心エコー認定医

活動報告

2024年度は総手術件数2,322件と前年度2,226件から増加、麻酔科管理症例は1,637件(全身麻酔1,547件、脊椎くも膜下麻酔11件、その他(無痛分娩など)79件)と前年度1,572件に比べ増加しました。医員の退職や手術室スタッフの不足もあり、9月から手術列の制限をせざるをえない状況となりました。非常勤医師に頼りながらではありますが、大幅な手術件数減少とはならず、手術件数、麻酔管理症例件数ともに増加できた点に関してはよく健闘したと思います。

2024年度4月から泌尿器科でもロボット支援手術が始まり、心臓血管外科では11月からEVAR手術も始まりました。部屋によってできることが違うため、手術調整を綿密にする必要があります。

今後の展望と課題

2024年度は常勤麻酔科医の減員に伴い、特に年度後半は麻酔管理料1の割合が減り、外部人件費が増加しました。今年度は常勤医師2名の増員ができませんでしたので、割と余裕を持った手術室運営が可能となりました。増員の効果については麻酔管理料1の取得率や外部人件費の割合を注視していこうと思います。全身麻酔件数2,000件を目標とすることや麻酔科収益を上げていくことを考えれば、常勤麻酔科医の増加や手術室スタッフの確保、手術室の増室が今後必要と思われますが、手術症例の入れ方や術間、手術時間以外の時間の短縮などソフトの面でも検討していく必要があると思われます。

病理診断科

担当医

○木野 茂生(病理診断科部長)

認定資格：日本病理学会病理専門医・指導医／日本臨床細胞学会認定細胞診専門医／臨床研修指導医

活動報告

患者さんが病院に来られて、適切な治療を受けていただく為には、まず、適切な診断がなされることが必要です。その際に、しばしば「病理診断」が最終診断として大きな役割を果たしています。病理診断科の主な業務は 1.細胞診断 2.生検組織診断 3.手術材料組織診断 4.手術中迅速検査 5.病理解剖の5つで、特に、がん死亡の2次3次予防について重要な役割を果たしています。

当科では、通常の染色や特殊染色に加え、一定の免疫組織化学的検索(50種以上)を自動免疫染色装置を活用し、正確な組織診断がなされる為の努力を行っています。さらに、診断に難渋する場合は、他施設の病理医を含めた検討や学会コンサルテーションなどの積極的活用を行っています。対象疾患は、内科系・外科系あるいは腫瘍・非腫瘍を問わず全ての疾患ということになります。特に、外科系であれば、消化器一般、呼吸器、婦人科、泌尿器の検体が多く、内科系では、肝生検、腎生検、皮膚生検、肺生検、骨髄生検をはじめ一般内科が取り扱う非腫瘍性病変全般も取り扱っています。また、各臓器の一般的な塗抹細胞診や吸引細胞診はもとより、細胞診断が重要な子宮がん、肺がん、膀胱がんなどのスクリーニング検査も行っています。

[主な検査機器]

1. 自動染色装置 2. 自動包埋装置 3. 自動尿標本作製装置 4. 自動免疫染色装置

[カンファレンス等]

毎週行われる乳腺外科、婦人科および呼吸器外科の術前術後カンファレンスには、病理医が直接参加し、総合的に患者さんの診断や治療方針に関する検討を行っています。また、解剖症例については、定例の院内臨床病理カンファレンス(CPC)を開催しています。

診断方法：

HE染色による病理組織診断、各種の特殊染色、酵素抗体染色(自動免疫染色装置)による補助的組織診断。パパニコロウ染色およびギムザ染色による細胞診断、各種の特殊染色、酵素抗体染色による補助的細胞診断。セルブロック作製による診断。外注検査として、PDL-1、EGFR遺伝子変異解析、RAS-BRAF遺伝子変異解析、ROS-1、Her2/neu(FISH)やALK-IHC、MSI、蛍光抗体染色、フローサイトメトリーなどの検査を利用しています。

今後の展望と課題

新専門医制度に対応するべく、専門医研修病院としての要件を満たす為に、協力いただける基幹型研修病院である大阪公立大学、近畿大学との連携を行っています。各分野、特に消化器系および外科系の専攻医研修の中で、選択研修としての病理診断科での研修の必要性をアピールし、総合的な医師の育成に寄与していきたいと思っています。

一方、現在、受託を行っている院所については、診断についてのさらなる精度管理、迅速性を追求し、的確な病理診断を提供できるように、随時、努力していきたいと考えています。一方、一人病理医の欠点を補う為の方策として①嘱託病理医との連携、②基幹型病院が行うカンファレンスへの参加、③病理学会コンサルテーションや近隣の病理医のコンサルテーションの積極的活用、④外部機関への免疫染色の依頼などを追求していきます。

また、現在参加している婦人科、乳腺外科、呼吸器科および一般外科系のカンファレンスのみならず、一般外科、消化器内視鏡部門や泌尿器科など他科のカンファレンスへの参加を具体化していきます。

放射線科

担当医

○岩本 卓也(放射線科部長)

認定資格：日本医学放射線学会放射線診断専門医・指導医／日本IVR学会 IVR専門医・指導医

○三田 裕記(放射線科医長)

認定資格：日本医学放射線学会放射線診断専門医／日本IVR学会 IVR専門医

活動報告

2024年度のCT、MRIおよびRIの年間総読影数は26,507件であり、昨年度と比較し、886件の増加がみられた。また検査の翌診療日にはCTでは72%、MRI 91%、RI 80%の返却率を達成している。またIVR件数は年間161件であり、前年に比べ30件以上増加した。内容はシャントPTA、中心静脈ポートが主であるが、腹腔内出血等に対する緊急止血術やCTガイド下ドレナージ等、各科の依頼に対応している。また放射線診断専門医1名が着任したことにより、技師の教育を進めている。

今後の展望と課題

和歌山県立医科大学放射線科と緊密に連携し、所属医師との遠隔読影システムの運用を行い、一層の所見時間の短縮や内容の充実を目指し、読影量の増加にも対応している。2023年度には診断専門医(かつIVR専門医でもある)医師1名が着任し、読影およびIVRとも一層のレベルアップをめざしており、IVRでは緊急止血術の対応やBRTOなども施行している。また来年度にはPACSが更新され、読影環境および内容も一層よくなるものと期待している。

組織健診科

担当医

○松浦 英夫(組織健診科部長)

認定資格：医学博士／社会医学系専門医・指導医／日本公衆衛生学会認定公衆衛生専門家／日本人間ドック・予防医療学会専門医・健診情報管理指導士・遺伝学的検査アドバイザー／日本医師会認定産業医・スポーツ医／認知症サポート医／日本結核・非結核性抗酸菌症学会認定医／ICD(Infection Control Doctor)

活動報告

第65回日本人間ドック・予防医療学会学術大会において、当科が発表した一般演題部門「健診センターにおける歯科保健指導」が最優秀ポスター発表賞に選出されました。

健診科は、保健師1名、看護師5名、事務12名という体制を整えました。受診には予約制をとりました。

健診受診者数は、人間ドックは2,670名(前年比103.5%)と昨年度より増加しました。しかし、特定健診1,904名(前年比91.9%)、5大がん検診9,043名(前年度比90.2%)は昨年度より減少しました。

健診後の保健指導の充実を図りました。特定保健指導を行うとともに、人間ドック受診者に対して保健指導を実施しました。保健指導実施率が27.9%(前年25.5%)と増加しました。

健診に携わっている職員全体のレベルアップと情報共有のため、月1回の運営会議、職場会議、全職種参加勉強会、学会発表等を実施しました。また、安全安心な健診を受けて頂けるよう、受診者に対する分かりやすい説明や健診前の手指消毒等々の感染予防策にも取り組みました。

情報発信手段としては、インスタグラム、フェイスブックといったSNSから健康情報等の発信を行いました。受診勧奨においてもSNSを活用して5日前にお知らせメールを発信して予約忘れによる未受診防止に努めました。

今後の展望と課題

- ・受診者の視点に立って、質と満足度の高い健診事業を目指します。
- ・新健診センターに向け、みみはら高砂クリニックとの役割分担を進めます。
- ・地域住民の健康増進とともに、地域で働く人々の健康への貢献を進めます。
- ・スタッフのレベルアップを目指します。
- ・受診者数の向上を図ります。
- ・健診後の保健指導を含めたフォローアップ体制の充実を図ります。
- ・学術面では学会発表や論文作成に積極的に取り組みます。

歯科口腔外科

担当医

○柳澤 高道(歯科口腔外科部長)

認定資格：日本口腔外科学会専門医・指導医／日本口腔感染症学会院内感染対策認定医・インフェクションコントロールドクター／臨床研修指導医／日本レーザー医学会安全教育講習修了

○中川 典子

認定資格：日本歯科放射線学会歯科用CBCT認定医

活動報告

2024年度は外来患者数が8,684名で、そのうち初診患者は315名であった。入院患者件数は140名で前年比は1.64倍と増加した。さらに他院からの紹介患者数は303名と前年比1.06倍と微増した。また、耳原歯科診療所との連携については、歯科診療所からの紹介患者数は129名(前年比0.81)で、当科から歯科診療所への紹介依頼件数は122名(前年比0.77)とお互いに前年より紹介患者数は減少した。

周術期口腔機能管理患者件数に関しては、周術期の初診患者数は1,372名で前年比1.05とほぼ増減なく、手術患者がそのうち約86%を占め、癌化学療法および緩和ケア患者の口腔機能管理件数は約14%で、癌化学療法および緩和ケア患者の口腔機能管理件数比率が前年比4%上昇した。退院時カンファレンス(多職種連携)参加件数は142件で前年比0.95と若干減少した。

また、病院としては急性期病院としての、生き残りをかけて最終的に全身麻酔手術件数2,000件を目標としている。その中で2024年度の全身麻酔手術目標件数は1,500件と設定され、それに伴い当科の手術目標件数は120件となった。2024年2月から水曜日に手術を縦3件実施していたが、体力的にきつい状況に置かれたため、手術枠の拡大を希望。幸いにも2024年7月より手術枠(月曜午後)が1枠増えたことで、2024年度の累計では全身麻酔手術件数は134件と目標件数をクリアできた。

今後の展望と課題

1. 2024年度の診療報酬改定において、当科の診療の柱の1つである周術期等口腔機能管理に関し、領域や施行条件の拡大が行われ、また回復期口腔機能管理が新設された。回復期病棟からの依頼の多くは義歯不調に関するものであることから、2025年4月より毎週水曜日(応援派遣歯科医)に義歯調整を実施するように計画している。
2. 2025年度の当院の全身麻酔手術目標件数が1,600件と設定され、それに伴い当科の手術目標件数が120+ α 件と設定されたため、地域医療連携の一層の強化により手術件数の増加に繋げたい。
3. これまで回復期病棟患者に対する回復期口腔機能管理の介入がman power不足と専門性の観点から対応が困難であったが、2025年4月より応援歯科医師(1日/週)の派遣が得られることになり若干ではあるが改善されるものと思われる。
4. 2025年度は全身麻酔手術件数の増加(1,600件)による周術期口腔機能管理患者のさらなる増加が見込まれるため就業時間内の対応が一層困難となっており、man power不足が大きな課題である。